

NPO 法人「校舎のない学校」研修プログラムに参加して

眞野典子*

2004年3月10日、11日の1泊2日の日程で、地域経済研究所の研修に参加させていただきました。2日間の研修内容については、資料として別添にお示ししています。私たち5人の参加者が受けた研修の内容は、資料のように大変綿密に立てられた計画に沿って、サンビレッジ新生苑の施設見学、車椅子の障害体験、プレゼンテーション、サンビレッジ宮路のグループホーム、デイケアセンター及び全国初という一戸建ての高齢者福祉住宅「ヴィラ・アソール」の見学、ワークショップ、サンヴィレッジ新生苑の施設での宿泊、地域の高齢者宅訪問、OHPシートを作成してのフィードバック報告会と、まるで学生時代に戻ったような忙しいものでした。

NPO法人「校舎のない学校」は、「ふるさと福祉村・西濃」の教育機能を担っており、「地域にある人、自然、文化、社会サービス、産業などがもっている力を再発見して、その力を生かすことができるようにすること、そこから学ぶことを手伝う」ことを実践内容としています。ちなみに「ふるさと福祉村」は、福祉コミュニティの創造・再生を基本目標として岐阜県が整備を推し進めているもので、本学でも鈴木誠教授、安井豊子専任講師と私が、梶原拓・岐阜県知事より委嘱を受け、ふるさと福祉村アドバイザーを勤めさせていただいています。

さて、非常に熱意あふれる盛りだくさんの研修内容のうちでも、今回の目玉とでもいうべきは地域の高齢者宅の訪問でした。プログラム作成側の意図としては、地域の人と対話をするを通して受講者に生活の意味を学んで欲しいということであったのでしょう。残念ながらソーシャルワーカーとして地域の援助現場にいた私にとっては、個人を生活者として理解すること

は当然のことで、特に目新しいことではなく、むしろ「講師」とされてしまった69歳の一人暮らしの女性の戸惑いの方を強く感じてしまいました。このことは別の場面でも、援助者側（研修プログラム作成側）の熱意が余りに強過ぎて、非専門職者側との間に温度差が生じていると感じました。言い換えれば、専門職者や高い理念に賛同したボランティアなどを含む専門職者側主導の構造になっている傾向があるのではないかということでした。「校舎のない学校」に携わる方たちの熱意は十分過ぎるほど伝わってきましたし、高い理念で高齢者福祉、高度な高齢者介護を推進してこられたことについては多方面からの評価を得ておられることであり、敬意を表するに値することです。その上で私の感想を申し上げれば、利用者や当事者の方たちの真の意味での自治活動が促進され、さまざまな地域活動や施設運営などに対等に参画するようになることが今後の課題であると考え、最終のフィードバック報告会でも提言させていただきました。

最後に、2003年10月に本学に就任した私にとって、今回の研修に参加された経営学部・野松先生、岩坂先生、高橋信一先生と親しく話をさせていただく時間を得たことは、本来の目的とは離れますが、ありがたい機会となりました。研修に参加させていただきましたことにお礼を申し上げます。

*経済学部助教授